

家族、幼児、家庭科に関する高校・大学生の意識

入江 和夫・江口 万友*

High School Student's and University Student's Perception of Family,
Young Child and Home Economics

IRIE Kazuo, EGUCHI Mayu*

(Received August 5, 2010)

キーワード：家族、幼児、家庭科、教員養成

はじめに

今日の日本の社会が抱える課題として、少子高齢化や家庭の機能の不十分さなどがあげられる。家庭科はこれらに対応する教科であり、究極的にはよりよい家庭建設を目標としている。これを達成するには男女の協力が不可欠であるが、歴史的に振り返ってみれば、1958年～1988年まで中学校技術・家庭科の家庭分野に該当する領域について女子だけが学び、男子は履修できなかった。この間の領域に「家族関係」はなく、衣食住中心の教科であった。平成元年中学校学習指導要領「技術・家庭」では「G 家庭生活」領域が新しく誕生し、男女必修となったが、「家族関係」的な内容は少なかった。中央教育審議会「新しい時代を拓く心を育てるために」答申では、家庭のあり方の見直し、家庭での会話の増加、家庭の絆を深めることなどを家庭に求め、平成10年に学習指導要領は改訂された。

本学教育学部生は「家族関係」が希薄な平成元年度学習指導要領に該当した家庭科を学習してきたことから、大学ではこのことに対応できるように授業を構築しなければならない。

そこで、授業の教材を検討するために、彼ら自身の「家族とのかかわり」とはどのようなものか、「幼児とのかかわり」をどのように考えるか、さらに「家庭科の意識」として、学ばせたい内容をどのように考えているかなど把握をしておくことは重要であり、このことから本研究を行った。その際、本学部生の特徴を明らかにするために一般高校生（同様の家庭科学習歴）と比較したので以下に述べていく。

1. 方法

1—1 調査内容：『児童・生徒の生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築—家庭生活についての全国調査の結果—』の「家族」「保育」に該当する内容

1—2 分析方法：2×2カイ自乗分析（実人数による）

*私立豊国学園高等学校

1—3 調査対象及び日時：山口大学教育学部2年生（男子42名、女子92名）2003年10月、「家庭生活についての全国調査」の高校2年生（男子1291名、女子1702名）2001年9月

2. 結果と考察

2—1 家族との関わり

家族がお互いに関わりを持ちながら、成長していく。しかし、その関わりが少なくなっていることが問題となっている。「食事」「家に帰ったとき」「会話時間」を調べることで、家族との関わりを明らかにしていく。

2—1—1 「食事」

家族と一緒に過ごす時間として食事があり、これによって家族とのコミュニケーションを深めることができる。ここでは朝食・夕食をそれぞれ誰と食えることが多いかを「家族のみんなと一緒に」「大人の誰かと一緒に」「子どもだけで」「一人で」「食べない」の選択肢の中から一つを選択させた。「家族のみんなと一緒に」「大人の誰かと一緒に」を合わせて「家族と一緒に」とし、「子どもだけで」「一人で」「食べない」を合わせて「子どもだけ」として、カイ自乗分析を行った。

朝食はその日の原動力になる大切な食事であり、起床して家を出るまで家族が顔を合わせることができる時間である。大学生（＝山口大学教育学部生は帰省時）の性別の違い、高校生・大学生の違いの結果を図1に示した。

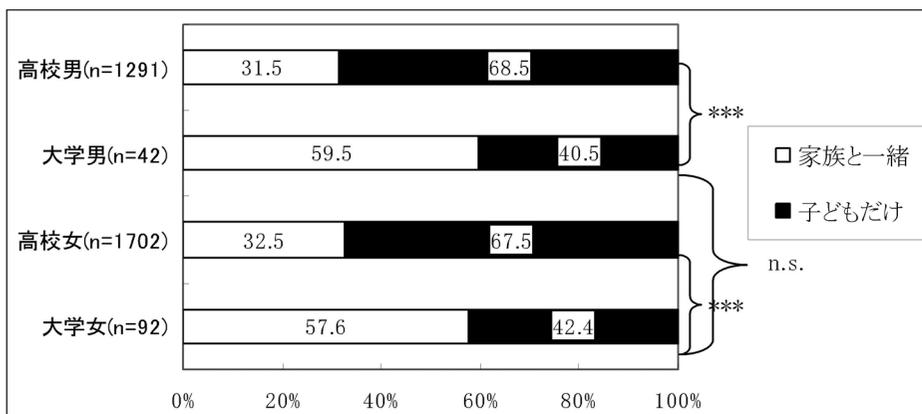


図1 朝食について

朝食を「家族と一緒に」に食べる大学男子59.5%（25人）、女子57.6%（53人）であり、約半数の大学生が家族と一緒に朝食をとり、性別による違いはなかった。高校男子では31.5%、女子では32.5%であり、高校生の方が「家族と一緒に」に食べる割合は少なかった。高校生はクラブ練習、登校時間の制約から朝は忙しく、大学生の帰省時に比べると家族とともに食事をする割合が低い結果になったと考えられる。家庭科では家族との食事を指導しなければならないが、大学生の約半数が実践しておらず食事の意味、役割を大学の授業で取り上げなければならない。

夕食について大学生（＝山口大学教育学部生は帰省時）の性別の違い、高校生・大学生の違いの結果を図2に示した。

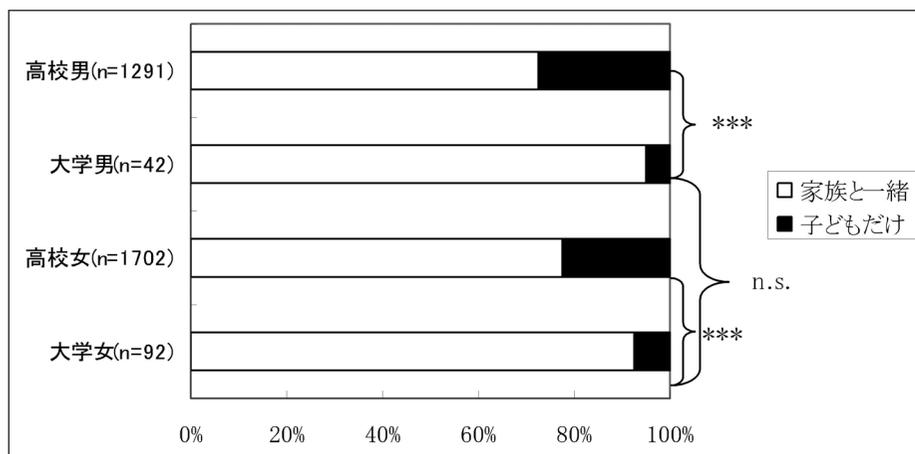


図2 夕食について

朝食と比べると全体的に「家族と一緒に」の割合が増加している。大学生に注目すると男子では95.2%（40人）、女子では92.4%(85人)であり、ほぼ全員の大学生が「家族と一緒に」に夕食をとり、性別による違いはなかった。高校男子では72.4%、女子では77.3%であり、高校生の方が「家族と一緒に」に食べる割合は少なかった。高校生はクラブ練習、学習塾などの制約から家族とともに食事をする割合が低い結果になったのではないかと考えられる。

以上のように、夕食を「家族と一緒に」にする大学生は多い。それは家族から離れた生活をしている下宿生だからであり、このことが「家族と一緒に」の食事をする力になったと考えられる。また、彼らを迎える親も同様の思いがあったに違いない。このことを改訂家庭科に転移して考えてみれば、すれ違いの多い生活→接触の必要性を親子が感じると考えていけば、子どもたちに食事の大切さと家族関係をリンクさせて理解させることができるのではないだろうか。

2-1-2 家に帰ったとき

家族にはその構成員の生活を維持し、保障するという生活保持機能や愛情や精神的安らぎの場としての精神的機能がある。今、家庭の機能が十分、果たされていないことが問題となっており、その理解が求められている。ここでは、家に帰ったときの「気持ち」、 「気持ちの理由」について明らかにしていく。

家に帰ったときの「気持ち」として「学校や外から帰ったときどのような気持ちになりますか。」との質問に対し、「うれしい」「ほっとする」「何も感じない」「つまらない」「家に入りたくない」「わからない」「その他」の7項目から一つを選択させた。「ほっとする」が高校大学生男女で55.1%～87.0%であったことから、肯定的カテゴリとして前2者をまとめ「ほっとする&うれしい」、前3者以降の否定的カテゴリ「何も感じない&つまらないなど」として分析し、その結果を図3に示した。

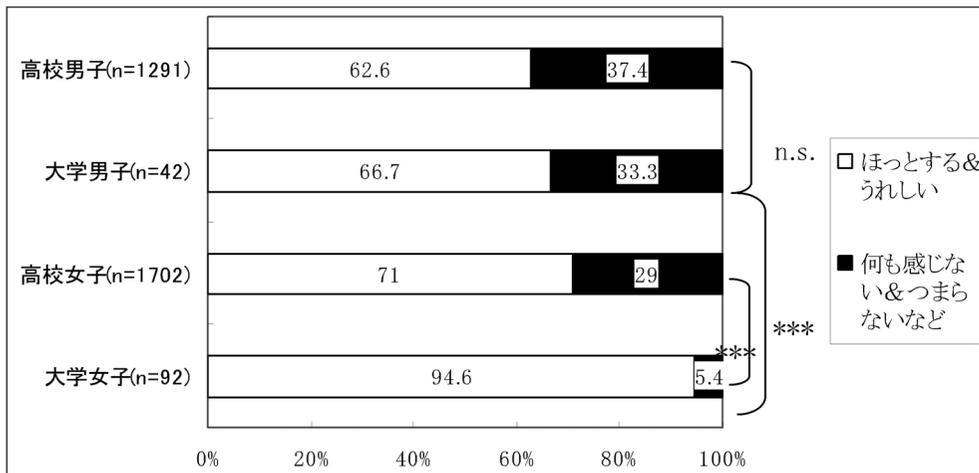


図3 家に帰ったときの気持ち

「ほっとする+うれしい」について、男子では高校生62.5%、大学生66.7%であり、女子では高校生71.0%、大学生で94.5%であり、過半数の学生が家に帰ったときに安堵感を得ていることが分かった。一般的に考えれば男女問わず、ほとんどの大学生が家に帰れば、「ほっとする+うれしい」となることを予想したが、特に大学男子の3割はそうではなかった。将来、大学男子も改訂家庭科を担当することから考えると「家族の精神的機能」をどう扱うのかの不安が残った。

図3の気持ち「何も感じない+つまらない」について、大学生に自由記述形式で、その理由について考察させた。その結果を表1に示した。

表1 「何も感じない+つまらない」の理由

- *男子は親のありがたみを感じていない
- *家に帰っても家族との触れ合いがあまりない
- *家事労働など家庭から期待される役割が少ない

「男子は親のありがたみを感じていない」から「何も感じない+つまらない」のではないかという理由であり、納得できる。このことは自分の成長を親との関わりから振り返ることが少なかったと言い換えることができる。「何も感じない+つまらない」→「ほっとする+うれしい」に改善させるにはその理解が改訂家庭科に必要である。

「家に帰っても家族との触れ合いがあまりない」の理由も納得できる。触れ合いによって得られる温かさ、心地よさは家に帰ることの誘引力となる。ここを理解させる必要がある。

「家事労働など家庭から期待される役割が少ない」は非常に重要な指摘である。戦後、小学校家庭科は一貫して「家事をすること」を通して「家族の一員」としての責任感を育んできた。しかし、これが大学男子にとって十分学習されてこなかった。改訂家庭科では家庭の機能を理解させることが非常に重要視されている。帰省して「何も感じない+つまらない」では家庭科を指導できない。それゆえ、この理由を生かした大学の授業を工夫していく必要がある。

2-1-3 父母との会話

これは大学生のみの調査である。家族の絆を深めるためには、豊かな会話時間が必要である。大学生と両親の電話を含めた会話について1ヶ月の平均時間(分)を調べ、図4に結果を示した。

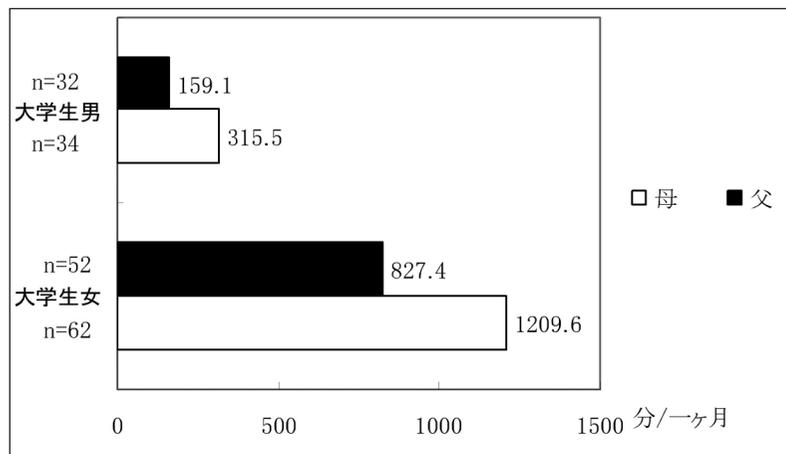


図4 会話時間

男子の会話時間は父親と1ヶ月平均159.1分(2.65時間)、母と平均315.5分(5.26時間)であった。女子では父親と1ヶ月平均に827.4分(13.79時間)、母と平均1209.6分(20.16時間)であった。男子の会話時間は女子に比べ約1/5~1/4であった。相談相手に注目すると、会話時間は圧倒的に母>父であった。おそらく母は家庭にいることが多く、父は仕事の都合などの理由が考えられる。しかし、男女が家庭科を学ぶ意義から考えれば父親が子どもとの会話を積極的に行うことは必要である。このことも大学の授業で扱う必要がある。

2-2 幼児とのかかわり

学生は幼児に対してどのような意識をもっているのでしょうか。ここでは、幼児の遊び相手をたのまれた場合の対応について調査した。設問は、「日曜日に近所の3~4歳の子ども遊び相手を1時間ぐらいたのまれた場合」、「引き受ける」かどうか、その「理由」、「どんな遊び」をしてみようと思うかであり、回答はそれぞれ選択肢より選ばせた。

2-2-1 遊び相手を頼まれたとき

「喜んで遊んであげる」「遊んであげる」「遊んであげたくない」「わからない」の選択肢の中から1つを選んで回答させ、「喜んで遊んであげる」「遊んであげる」を合わせて「引き受ける」、「遊んであげたくない」「わからない」を合わせて「引き受けない」として分析し、図5に示した。

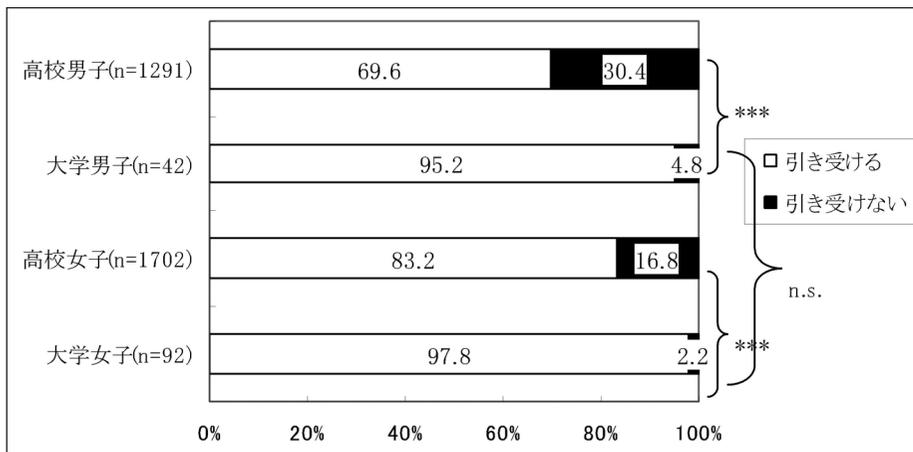


図5 幼児の遊び相手を頼まれたとき

子どもの遊び相手を引き受ける男子に注目すると、高校生69.6%（898人）、大学生95.2%（40人）であり、女子については高校生83.2%（1416人）、大学生97.8%（90人）であり、男女とも大学生の方が多かった。しかし、大学生間の男女には差はなかった。小学校教員を目指す学生であるがゆえに、高校生よりも「引き受ける」人数の割合が多くなったと考えられる。

2-2-2 遊んであげる理由

遊んであげる理由「子どもが好きだから」「頼んだ人が喜ぶから」「頼まれたから当たり前」「自分のためになるから」「子どもは好きではないから」「自分の好きなことができないから」「遊ばせ方がよく分からないから」「分からない」の選択肢の中から1つを選んで回答させた。大学生では「子どもが好きだから」が約8割を占めていたので、この項目と「それ以外」として分析し、図6に示した。

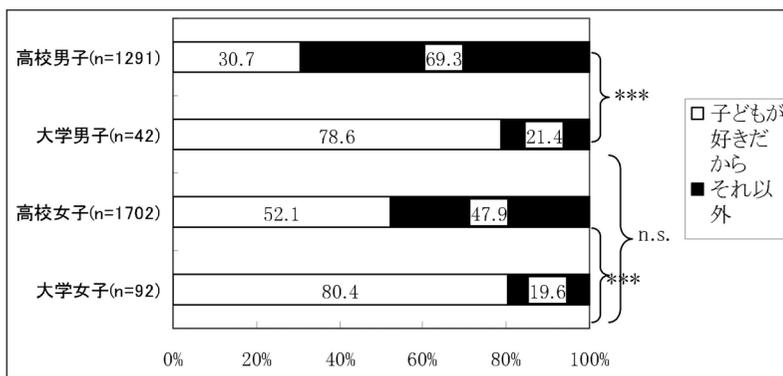


図6 遊んであげる理由

男子に注目すると「子どもが好きだから」について高校生30.7%、大学生78.6%であり、女子に注目すると、高校生52.1%、大学生80.4%であり、男女とも大学生の方が多く、性差は見られなかった。大学生の「子どもが好きだから」が多いのは教育学部生だからと考えられる。

2—2—3 どのような遊びか

「日曜日に近所の3～4歳の子どもの遊び相手を、1時間ぐらい頼まれたとき、子どもと一緒に、どんな遊びをしてみようと思いますか。」で、「遊ばせ方が簡単な遊び」「子どもが喜ぶ遊び」「子どものためになる遊び」「けがの心配の少ない遊び」「自分も楽しい遊び」「わからない」「子どもとは遊びたくない」の選択肢の中から1つを選んで回答させたところ、高校大学男女共通して第一位は「子どもが喜ぶ遊び」(53%～71%)を占めた。これに「子どものためになる遊び」「けがの心配の少ない遊び」を加え「子どもが喜ぶ遊びなど」とした。第二位は「自分も楽しい遊び」(9.5%～16%)であり、残りの項目も加え「その他」として分析し、図7に示した。

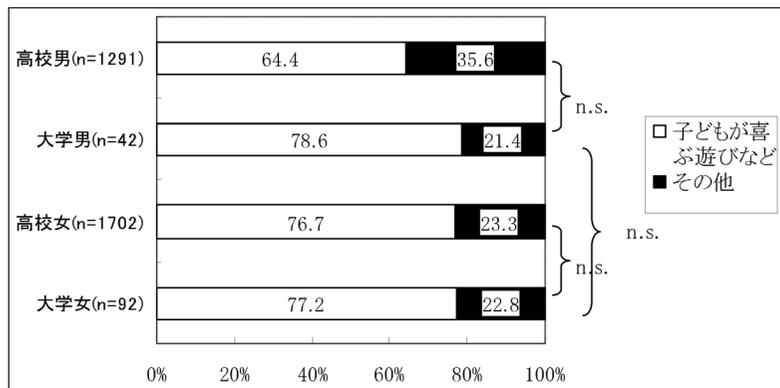


図7 どのような遊びか

男子に注目すると「子どもが喜ぶ遊びなど」について、高校生64.4%、大学生78.6%であり、女子では高校生76.7%、大学生77.2%であり、高校・大学生間、男女間には違いはなかった。子どもの遊びを頼まれたとき、高校生大学生とも子ども側に立って遊ぶことがわかった。

2—3 家庭科の意識

大学生が将来家庭科を教える場合、自分が学んできた家庭科の好き嫌いや印象が大きな影響をもつと考えられる。そこで、本教育学部生に対し、これらと今後、学ばせたい家庭科の内容について調べた。

2—3—1 好き嫌い

好きな教科であれば、学習に対する興味関心も強く、学習意欲も高まる。大学生は家庭科が好きかどうか、その割合を図8に示した。

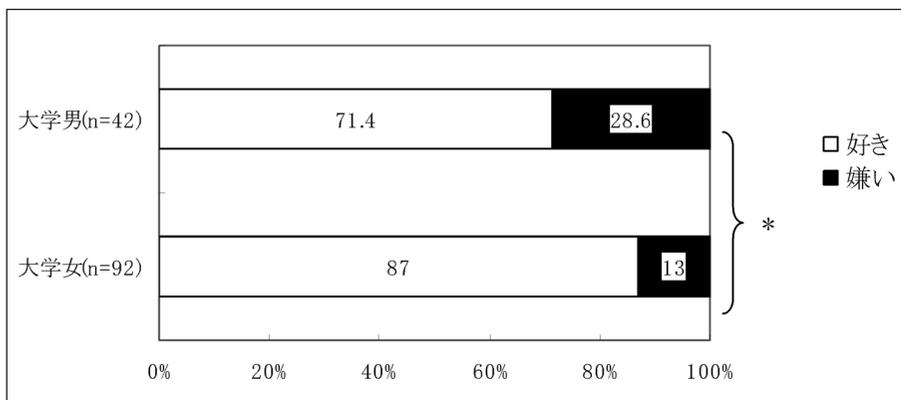


図8 家庭科について

家庭科が好きな割合は男子71.4% (30人)、女子87.0% (80人) であり、7割を超えた学生が家庭科に好感を持ち、女子の割合は高かった。家庭建設に関わることから考えれば、特に男子が家庭科を学ぶ必要があるとともに、家庭科をいっそう好きになる要因とは何かを探る必要がある。

2—3—2 印象に残った内容

学習内容を小学校の家庭科学習指導要領をもとに分けると、家庭の仕事や家族との触れ合いについて学ぶ「家庭生活と家族」、日常着の着方や手入れや被服製作について学ぶ「被服」、調和のよい食事のとり方や調理について学ぶ「食物」、身の回りを快適に整えることについて学ぶ「住まい方への関心」、「物や金銭の使い方と買い物」、近隣の人々とのかかわり、環境に配慮した生活への工夫について学ぶ「家庭生活の工夫」の6項目であり、この中から1つを選択させた。結果、「食物」「家庭生活と家族」「被服+その他」の3つに集約でき、それを図9に示した。

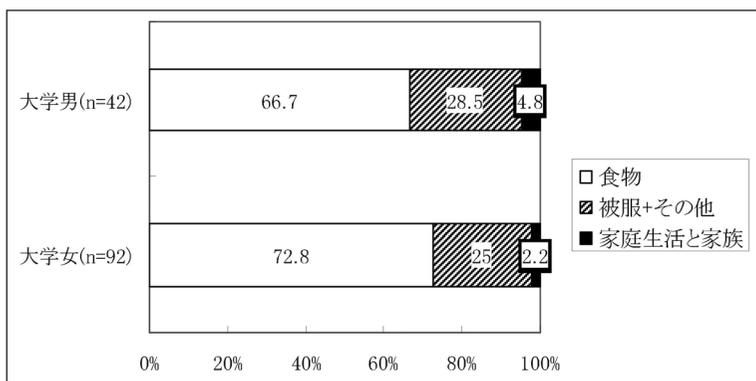


図9 印象に残った内容

男子では「食物」66.7% (28人) > 「被服+その他」28.5% (12人) > 「家庭生活と家族」4.8% (2人) > となり、女子では「食物」72.8% (67人) > 「被服+その他」25.0% (23人) > 「家庭生活と家族」2.2% (2人) となっており、男子と同じだった。改訂では「家庭生活と家族」が重視されているが、学生が学んだ家庭科は平成元年度版であり、特

に中学校技術・家庭では希薄だったことがこの結果になったと考えられる。

2—3—3 学ばせたい内容

大学生が子ども達に家庭科で学ばせたいと思う内容について、上述の6項目の中から1つを選択させた。その結果を図10に示した。

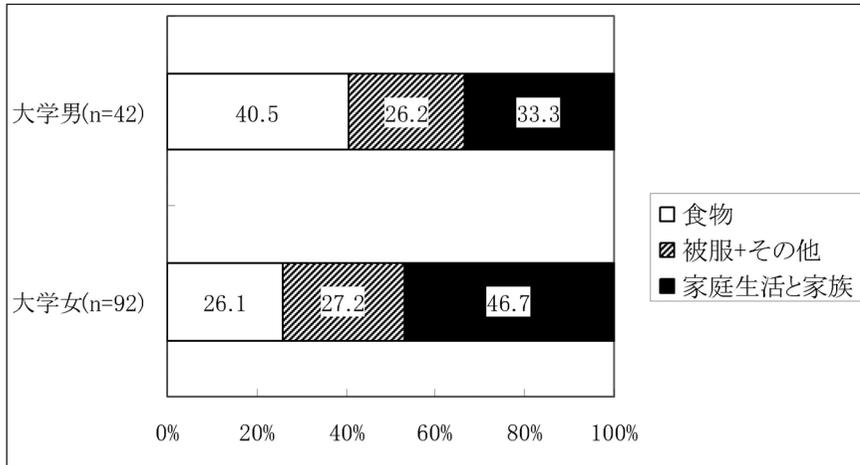


図10 子ども達に学ばせたいと思う内容

男子では「食物」40.5% (17人) > 「家庭生活と家族」33.3% (14人) > 「被服+その他」26.2% (11人)の順であり、女子では「家庭生活と家族」46.7% (43人) > 「被服+その他」27.2% (25人) > 「食物」26.1% (24人)の順となった。「家庭生活や家族」に注目すると、印象が最も薄い内容であるにもかかわらず学ばせたい内容として大幅に上昇した。このことは衣食住と並んで「家庭生活と家族」も大切であることを認識している結果であり、学生が小学校でこのことを授業できるように家族問題などに関する教材を検討していかなければならない。

おわりに

結果は以下のようにまとめられる。

1) 家族との関わりについて、大学生（帰省時）と高校生の同性を比較すると、大学生の方が朝食、夕食を「家族と一緒に」食べる割合が多かった。家に帰った時の気持ちについて、高校・大学生の過半数が「ほっとする＋うれしい」の気持ちを持っていた。特に大学女子はほぼ全員であった。一方、大学男子の3割は家に帰ったときに「何も感じない＋つまらない」気持ちを持っていた。この理由として「男子は親のありがたみを感じていない」「家に帰っても家族との触れ合いがあまりない」「家事労働など家庭から期待される役割が少ない」があげられた。大学生の親に対する1ヶ月平均会話時間について、男子では父親と2.65時間、母と5.26時間であり、女子では父親と13.79時間、母と20.16時間であり、男子の会話時間は女子の約1/5～1/4であった。会話する相手は母の方が圧倒的に多かった。

2) 幼児との関わりについて、高校・大学生の過半数以上が子どもの遊び相手を「引き受

ける」と回答し、大学生の方が多かった。また大学生間では性差が見られなかった。遊んであげる理由として「子どもが好きだから」は高校生の3割～5割、大学生の8割が回答した。また、どのような遊びかについて、「子どもが喜ぶ遊びなど」子どもの立場で考えた遊びが多かった。

3) 家庭科の意識について、7～8割の大学生は好きな教科であった。印象として残った内容は7割が「食物」であり、「家庭生活と家族」は1割未満であった。しかし、子どもたちに学ばせたい内容では「食物」「被服」と並んで「家庭生活と家族」は増加した。

以上の結果から、特に小学校教師を目指す大学生に向けて今後の家庭科教育から一考する。中央教育審議会第一次答申では特に心の教育の充実の観点から、「家庭のあり方の見直し」、「家庭での会話を増やすこと」、「家族の絆を深めること」、「子育ての意義」などがあげられ、これを受けて改訂家庭科となった。今回の結果から、高校・大学生の「家族との関わり」、「幼児との関わり」は良好な結果であったが、帰宅したときに「何も感じない+つまらない」気持ちを大学男子の約3割が持っていることが、今後の課題として残った。言い換えれば、「家庭の精神的機能」が十分、理解できていない結果であった。改訂家庭科で新規に盛り込まれた文言「自分と家族のかかわりを考え」「家族との触れ合い」「家庭生活に関心を持たせる」によって「家庭の機能」が理解できるように大学の授業で工夫していく必要がある。

参考文献

文部省：「中学校学習指導要領（平成10年12月）解説」，1999.

文部省：「「新しい時代を拓く心を育てるために」一次世代を育てる心を失う危機―」中央教育審議会（答申），1998.

日本家庭科教育学会：『児童・生徒の生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築―家庭生活についての全国調査の結果―』，2003.